

平成24年度の学校評価

1 建学の精神

不言実行 あてになる人間

2 重点目標

教員の意識改革なくして少子化の中で生き抜いていくことは不可能といえる。教員個々の「個性」を生かす指導に心をとめながら、生徒のそれぞれの気持ちを汲み取れる信頼される教師を目指し、不断の努力を惜しまない。

ア 教師(わかる授業の工夫、授業力の向上)、生徒(授業規律や授業を受ける姿勢の改善)の両者に学力向上の姿勢をもつ。

イ 部活動、学校行事をマンネリ化、硬直化させない。

ウ 社会生活に必要なルールやマナーの涵養と人間として当たり前の行動がとれる規範意識、善悪の価値判断など「心の教育」を教育活動全般をとして教える。

	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
渉外部	中部大学との「高大一貫教育」「特進コース」「女子生徒の入学増」など本校の特色を発信し、募集定員の確保に努める。	(1) 特進、一貫コースの人数確保するため、関係機関をとおして本校の特色を積極的に広報する。 (2) 高大一貫の定着を図り、女子生徒数を増やす方策を検討する。 (3) 元気で魅力ある学校を目指して学習指導、部活動や学校行事をさらに充実させる。 (4) 全職員が渉外活動に参加する場を設定する。	(1) 学校見学会の司会、オープニング、学校説明、案内など生徒会生徒を中心に運営をした結果、親しみ易く好評であった。 (2) 特待生、スポーツ奨学生を含めた募集定員の獲得に努めた結果、優秀な生徒を多く集めることができた。 (3) ユネスコスクールとしてボランティア活動、文化部合同・吹奏楽発表会等をとおして、近隣市町や日進市民に信頼される学校を発信できた。 (4) 若手教諭に研修の一環として私学展に参加してもらった。
総務部	(1) 災害発生時の対応の強化。 (2) 1年生OR(オリエンテーション)合宿、2年修学旅行の充実。 (3) 総務部の行事及び内容の検討	(1) 大規模災害発生時のマニュアルの整備をする。 (2) OR合宿の実施方法及び内容と国内修学旅行の場所、内容を検討する。 (3) 地区懇談会、中部大学見学会等学校行事を検討する。	(1) 「生徒の引き渡し・緊急避難カード」の運用を実際に行った。緊急避難速報型の訓練は着手できなかった。 (2) 平成25年度入学生に対するOR合宿の内容を学年会と調整しながら検討した。国内旅行の変革はなかった。 (3) 平成25年度PTA総会を第2土曜実施から第3土曜に変更した。
教務部	(1) よりよい授業の確立。 (2) 業務分担の複数化。 (3) 文具や用品・備品の節約。	(1) 教育課程委員会や教科会等で履修態度に問題がある生徒の情報交換を定期的に行い、担任や学年会から教科担任と連携し、生徒の初期指導に努めた。 (2) 各業務で複数の担当者を配置し遂行するようにして不慮の事態に備える。 (3) 無駄遣いを控え再利用を勧め、経費の節減に努める。	(1) 落ち着いた授業が行えるように授業内容を工夫し、問題のある生徒には段階的指導をするなど取り組みを行った。全体的に落ち着いた授業が行われているが、問題が潜在化している授業もある。 (2) 協力して業務を行なえるようにした、まだ専門性の高い仕事も徐々に改善されている。今年度は幾つか不慮の事態が生じたが、大過なく各業務に対応できた。 (3) 文具・用品は繰り返し利用し、できる限り回収し再利用などして節約に努めた。
生徒指導部	(1) 身だしなみ指導の徹底と規律の向上に努める。 (2) 登下校時のマナー向上と交通安全に努める。	(1) 問題行動の抑止と発生後の初期対応に努める。 (2) 登下校のマナー向上を図るため教員による校内外指導の実施や啓発活動を行う。 (3) 交通マナーと交通安全教育を検討する。またPTA街頭指導をサポートし合同指導を行う。	(1) 生徒指導用紙の導入により「身だしなみを正す」意識が定着してきた。今後指導基準(教員の目線)の統一を図る。 (2) 交通安全、通学マナー指導など関係機関と迅速な対応を図った結果、大きな事故もなく、また苦情件数も減少した。 (3) 通学バスの利用者が多いため、ルールの徹底が重要である。
特活部	(1) 全員参加型の文化祭を継続し、展示の質を高める。部活動を支援する。 (2) 教育相談を充実する。	(1) 文化祭を9月第2週の金・土曜日とし、7月中旬に準備期間を設ける。 (2) 新規部承認と予算消化実績に応じた推進費配分を進める。 (3) カウンセラー実施日を週2日にし、連絡日を設定する。	(1) 準備期間、文化祭1部は全員参加。展示発表日公欠者は昨年比でやや減少した。 (2) 文化部の活動を支援した。本校部活動のないアイスホッケー、水泳、空手道等の国体等出場の個人を支援する。 (3) 教育相談会議で話題となった事柄に共通理解のもと早期に対応する。

研修部	(1) 研修会の充実。 (2) 現職教育の模索。 (3) 学校生活意識調査の実施と分析。 (4) 保護者対象に「学校評価調査」の実施。	(1) 初任者研修会、初任者研究授業の実施。2年目研修の実施。 (2) 事例研究の内容の検討と実施。 (3) 学校生活における意識調査(生徒対象)・学校評価(保護者対象)の実施と分析。	(1) 初任者教員に対する研修会、研究授業を丁寧に実施した。 (2) 中部大学伊藤守弘准教授により「放射能のはなし=放射線の人体への影響=」というテーマで講演を実施した。次年度以降も実施の方向で考えたい。 (3) 意識調査・学校評価のデータを分析した。
進路指導部	(1) 自分の興味や適正を早期に自覚させる。 (2) 主体的に自らの将来の目標を設定し、進路を確保させる。	(1) 進路未定者を出さない。 (2) 中部大学への進学を確保する。 (3) 中部大学100名、就職一次合格80%、国公立大学10名、進路未定者0名。	(1) 就職一次合格は約56%だった、要因として大手企業が採用を手控えたこと、選考方法が変わったことが考えられる。 (2) 中部大学は、124名が合格した。 (3) 国公立大学は5名が合格した。
普通科	(1) 中部大学で活躍(学習・行事・部活動)できる生徒を育成する。 (2) 中学生に魅力ある学校を目指す。 (3) 学力保障体制を充実させ、進学実績を向上させる。	(1) コース別進路目標を設定する。 (2) 基礎学力の強化を図る。 (3) 模擬試験、検定を積極的に活用する。 (4) 学習到達目標を設定する。 (5) 日進市内・近隣市町中学生にとって魅力のある学校づくりを目指す。	(1) 自習室利用者も多く学習習慣の定着がみられたが、一般入試まで気持ちの持続ができなかった。 (2) 学習に自信や達成感を持たせるため、科全体の目標を英語検定に絞り、生徒を合格に導き、学力向上に繋げていく。 (3) 一貫コースの価値を高めていくために進路実現を意識した指導を展開していく。 (4) 学習先頭集団を育て、学級全体が学習に前向きな雰囲気になるよう指導していく。
機械電気システム科	(1) ジュニアマイスター顕彰取得者増を目指す。 (2) 実習環境の整備。 (3) 技能大会(ものづくり)技能検定への参加種目の検討。 (4) 習熟度別クラス編成により、それぞれの能力に応じて理解度を深める。	(1) ジュニアマイスター顕彰を目標に取り組み検定試験の年間計画を作成し、教員が指導し易い環境を作る。 (2) 不要物を廃棄し環境整備する。 (3) 昨年度初めて「旋盤作業競技大会」に参加した。他にも教員の技術レベルの向上と生徒の「ものづくり」の意識付けができる競技大会・技能検定の種類を検討する。 (4) 今後も効果が見込められる科目は習熟度別クラス編成をする。	(1) ジュニアマイスター取得者は16名(ゴールド6名・シルバー10名)昨年度4名に対して取得者増となった。さらに受賞者が増加するよう指導を重ねる。 (2) 実習室で実習機材が安心安全に扱えるよう整理・整頓と環境整備を進めている。 (3) 「旋盤作業競技大会」に参加して昨年度より順位が上がった。また3級技能士「機械加工-普通旋盤作業」1名合格した。 (4) 今年度は習熟度別クラス編成を実施しなかったが、必要に応じて実施する予定。
1年生	(1) 生活面 ア 行動力の向上。 イ 学校生活の充実。 (2) 学習面 ア 学習環境の充実。 イ 進路にあった学習指導。	(1) 「自ら考え行動する」「言われる前に行動する」姿勢を徹底するためにHR、集会など機会を捉えて意識の高揚を図る。 HRなどで進路指導を充実させ、具体的な目標を設定させる。 (2) 目標のある落ち着いた生活を送れるよう学習環境を整える。 ア 資格取得、補習への参加、自習室利用など学習機会への積極性を持たせる。 イ 授業は学年間、担任間、教科担任間のそれぞれの連絡を密にし、早めに状況把握し対処する。	(1) 1年生の早い時期に基本的な生活習慣の確立を図りたい。 (2) 教科担当と担任との連携を図る。特に授業への取り組みは、普段から大切にしたい。 (3) 学力の向上と進路の意識付けだけでなく、自ら学習に取り組む姿勢を養う。
2年生	(3) 普通科(特進、一貫、進学)・機械電気システム科(機械、電気、情報)の各コースの特色を活かした指導。	(3) 科・コースの特長を活かした、独自性のある取り組みを展開する。 (4) 授業への取り組みができるよう、学習環境の充実に努める。	(1) 各科の特色を活かし、生徒全員が納得できる進路を確保するため指導をする。 (2) 進路希望別指導を11月より始めた結果、上位者の学習意欲が高まってきた。 (3) 機械電気システム科において積極的に資格取得に取り組んだ。
3年生			(1) 生活・学習習慣について粘り強く指導した結果、殆どの生徒は進学就職ともに進路を確保できた。 (2) 生徒及び保護者に対して早々に進路意識を持たせる工夫する。 (3) 生活・学習態度など、進路決定に向けての指導と進路決定後の指導が必要である。

平成25年度年度入学生から新学習指導要領に対応した指導内容で取り組むことを踏まえて、学校が掲げた目標に迫るため様々な取り組みをしてきた。さらに、平成25年度に向けよりよい学校運営をするために各分掌・学年の評価を以下の四領域でまとめた。

学習指導面では、日常的な授業規律の徹底と基礎学力の定着化を図ることに努めてきた。とりわけ基礎学力を身につけさせるために、ベーシックなどの学び直しの学習を充実させ、授業や成績不振者に対する指導に取り組んできた。授業規律を図り学習効果を上げるためには教師による授業力の向上を図る研修が不可欠である。生徒に学ぶ意欲を育成し、わかる喜びを実感させる授業実践をするために、授業観察や授業評価の活用、校内授業研究をとおして、授業の改善に向けた工夫等の情報の共有や意識改善など学校全体で教科指導力の向上に一層努めたい。大学入試問題研究を実施し、授業に反映させる。またわかる授業づくりのために、新しい教材研究を行うのも一つの方法である。

生徒指導面では、落ち着いて生活できる校風をつくるため、学校全体の指導について共通認識の確立と共有によってしっかりした指導体制をつくってきた。基本的な生活習慣を確立させ、社会生活で力を発揮できる規範意識と社会性を持った生徒の育成を目標に、「良いところを伸ばし、成長に目を向けた育成的な指導」を心掛けてきた。現在、本校が行っている生徒指導で「段階指導」を行っている。教員による組織的な取り組みの成果で、今まで「段階指導」に至らなくても生徒が改善していくような教職員の落ち着いた対応がみられるようになった。今後も問題行動を起こさせない予防指導が第一と考え、「後追い指導」にならない、「前向きで積極的な指導」に心掛けることを推進したい。さらに家庭との連携やPTAの協力をすすめる、共通理解を深めながら学校生活の充実につなげることも重要である。

進路指導では、3年間を見通した進路システムの確立が求められる。中部大学との高大一貫教育による中部大学への進学率の向上とそれに見合った学力を身につける。そのためにも放課後や長期休業中の補習を充実させ、生徒の実力を高めるために各科の取り組みを整理・再検討する必要がある。また本年度、就職採用試験が大幅に変わった、例年適性・面接試験だけで合否を決めていた会社の多くが能力検査を加え実施する傾向にあり変化がみられた。学ぶ楽しさを実感し進路の希望を実現できる授業をするなかで、基礎学力を身につけ採用試験に対応できるようにしたい。

部活動は、男子バスケットボール部は県予選を勝ち抜き、全国高等学校体育大会(石川県金沢市)・東海大会(岐阜県高山市)出場、さらに愛知県高等学校新人大会優勝、東海大会(三重県鈴鹿市)準優勝という結果であった。陸上部は年々力をつけ、第67回名岐駅伝大会では愛知県高校の部で第5位と上位に入った。男子ソフトボール・ゴルフ部が共に中日本大会に出場した。一方、文化部はロボット技術部が全国大会、囲碁部が3年連続東海大会に出場した。第4回「文化合同企画展」(7部による)・吹奏楽部定期演奏会を開催した。共に大変盛況であった。また平成25年度から女子ソフトボール部を立ち上げることになり、今後の活躍が大いに期待される。